

勤務医部会だより

ファウチ効果



幹事 奥村明彦
(海南病院 病院長)

新型コロナウイルスの世界的大流行がはじまって1年3ヶ月あまりが過ぎた。世界各地で医療崩壊が進み、防護服を着た医療従事者が必死で治療を行っている映像が、毎日のようにテレビで流された。そのような状況のなかで、徐々にクローズアップされてきたのが、「医療従事者へのエール」という言葉である。エールの送り方は、世界各国まちまちであるようだが、スイスのジュネーブでは、午後9時に街中で人々が拍手をしたり口笛を鳴らしたりして、医療関係者に感謝の意を表す運動がわき起こっていると報道された。また、先般のブルーインパルスの壮大なパフォーマンスによるエールには、多くの人が感動した。当院は小学校に隣接しているが、教室の窓には、児童の皆さんが書いた、「医療従事者の皆さん頑張ってください」という応援メッセージがずっと掲げられている。生徒さん一人一人が心を込めた応援メッセージを書いた絵手紙を送ってくれた学校や、医療従事者への応援ソングを歌ってくれている映像を我々に送ってくれた学校もあった。また、本当に多くの方々から、ご寄付や支援物資をいただいております。温かい励ましの言葉をかけていただいております。目頭を熱くした職員も大勢いる。大勢の方々、コロナと最前線で戦う我々医療従事者を応援してくれることは、本当にありがたいし、心の支えとなっている。しかしながら、ご寄付や支援物資を送っていただくということは、大変なことであり、一般の方が誰でも簡単にできることではない。誰もが送っていただける、我々医療従事者にとっての究極のエールとは、感染して病院に来る人を一人でも少なくすることである。当たり前のことであるが、これ以上のエールはないと思う。

最近のマスコミ報道は、評論家が難しい変異株の話を持ち出し、感染者が1日数千人になるというような、むやみに恐怖心をあおるような内容の報道ば

かりである。広く一般の人たちに危機感を持っていただくことは大切だが、N501Y変異株などという言葉聞いて一般の人はどのように感じているのだろうか。マスコミの影響は大きい。そして報道には社会的使命というものがあると思う。マスコミ報道と、医療現場における想いには、大きなずれがあるように思えてならない。医療現場の真の叫びを的確に伝えてもらうことができていることが歯がゆい。

米国では、医学部が異例の人気ぶりとなっているそうである。全米医科大学協会 (AAMC) によると、今年の志願者数は前年比18%増と10年ぶりの大きな伸びを記録したそうであり、今回の医学部人気に比べられるものは、9・11の同時多発テロ後、米軍の入隊志願者が急増したことくらいとも言われている。新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、最前線で患者の治療に尽力する医療従事者や、米国国立アレルギー感染症研究所所長として感染対策を主導するアンソニー・ファウチ博士ら公衆衛生専門家の活動に刺激された動きとみられており、「ファウチ効果」とも呼ばれているらしい。日本と米国では教育システムも異なるし、社会的な状況も大きく異なるため、単純な比較はできないが、米国には、真剣に自分のやるべきことを考えている若者が大勢いるようである。そしてこのような動きの原動力には、もしかすれば米国における報道のあり方というもの大きく関わっているのではないかと思う。日本ではどうかと言われれば、国公立大の薬学 (115%) と医学 (105%) の志望者が前年より若干増えたらしい。私たちの姿を見て、医療に関わる職業に携わろうという気持ちを持っていただけるのであれば、それは私たち医療従事者にとっての最大級のエールであると思う。